

北京日本人学校と北京市月壇中学の国際交流弁論大会

— 20年続く国際交流 —

前北京日本人学校 教諭

山梨県上野原市立巖中学校 教諭 八重幡 理

キーワード：国際交流，日中友好，言語力，課題解決能力

1. はじめに

北京日本人学校は在外教育施設としては比較的歴史が深く、2005年度には創立30周年を迎え、翌2006年度には記念事業を行った。その30余年の歴史のなか、各学年部それぞれ国際交流の機会を設け、実践してきた。中国現地校との交流はもちろんのこと、一大国の首都ゆえにある多くの外国人学校や国際学校ともそれぞれの特色をいかした交流が図られてきたと聞いている。しかし、ここ数年の傾向として、なかなか簡単に交流ができなくなりつつあるということが挙げられる。日本人学校と現地校・外国人学校・国際学校との間に、交流内容の見解の相違や交流そのものに対する考えの違いなどがあつたり、カリキュラムが大きくずれていたりしてお互いの調整がうまくいかず、交流までこぎつけられないようなケースが少なくない。

そういった状況下の国際交流事業のなかでも特筆すべきものが、中学部の国際交流弁論大会である。北京日本人学校中学部と北京市月壇中学との間で20年もの間、絶やさずに続いている。代表弁士がそれぞれ相手国の言語で弁論を行い、聴衆として参加する生徒も交流活動を行うというもので、中学部としては修学旅行や運動会にも準ずる大行事である。2007年度には「第20回」と「日中国交正常化35周年」という二つの意味をあわせた記念大会が挙行された。

私は幸運にも中学部国語科ということで、この事業を3回担当することができた。代表弁士の変容・成長はもとより、聴衆として参加する中学部生徒たちにも多大な教育的効果があつたと振り返る。本稿では、その国際交流弁論大会について報告したい。



2. 活動の実際

(1) 北京市月壇中学について

北京市月壇中学（以下“月壇中学”）は、北京市唯一の「日本語を第一外国語としてカリキュラムに位置づける中学」である。そのため、「日本語」という授業が英語よりも多く履修され、多い学年では週5時間に及ぶ。中国では、日本で言う中学校と高校を併設しているものを「中学」と呼ぶことが多いが、月壇中学もその例にもれない。日本との関わりは深く、修学旅行先が日本であったり、逆に日本からの修学旅行生を受け入れて交流活動を行ったりしている。2006年の安倍首相訪中のときには、首相夫人が表敬訪問している。

北京日本人学校と月壇中学は20年もの間、交流活動を続けてきた。その中心はもちろんこの国際交流弁論大会だが、可能な年には音楽交流を行ったり、お互いの授業参観など教員同士の交流も行われたりしている。惜しむらくは、北京市の東部にある日本人学校、西部にある月壇中学という具合に、地理的に離れている点である。もう少し近く、お互いの行き来が気軽にできるようであれば、授業交流なども行われているところであろう。

(2) 事前の取り組み

① 弁士の取り組み

例年、大会は12月第1土曜日に行われる。日本人学校では、生徒の取り組みは夏休みから始まる。中には中国語を母語同然にふだんから扱う弁士もいるが、そうでない者にとっては夏休みから始めないととても間に合わない。以後、本番まで、弁士の中国語能力に応じて、国語科担当教師が、中国語講師や中国人スタッフに協力を仰ぎながら、個々に支援をしていく。

時 期	生徒の活動	教師の支援
夏休み	発表構想づくり	提出されたものを指導 (伝えたいことは何なのか、を中心に)
9 月	日本語での原稿づくり	日本語作文指導 (国語科)
	中国語への翻訳 (生徒によっては上記手順が逆の場合も)	中国語翻訳指導 (中国語講師)
10 月	原稿確定～練習	範読作成 (中国語講師・国語科)
	代表選考のためのオーディション	審査 (中国語講師・国語科)
11 月	本番にむけての練習 (クラス訪問・リハーサル等)	発声・ジェスチャー指導 (国語科) 発音指導 (中国語講師・中国人スタッフ)

代表弁士枠は中学部全体で6人である。うち、学年枠を1ずつ、オープン枠を3としている。例年10人を超える程度の者が挑戦する。オーディションを経て最終的に6人に絞る。

② 交流会の取り組み

大会当日には、審査の時間を利用して、参加者全員が参加する交流会を行う。日中双方の発表の後、グループ交流を行うのが慣例である。それに向けた取り組みを実行委員会が中心となって展開していく。担当教師はつくが、他の中学部の活動同様、あくまで生徒の主体的な運営に任せている。

時 期	生徒の活動	備 考
10 月	実行委員会発足	中2を中心とした組織作り
	発表内容決定	例年、中学部全体合唱 + a (代表者による応援・ダンスなど)
	交流グループ決定	中国語が話せる者をバランスよく分ける。
11 月	本番にむけての練習 合唱練習	合唱曲は、その年の中学部学習発表会での曲と中国語曲「朋友」
	名刺作り	表面は中国語、裏面は日本語

北京日本人学校は学年が上になるほど国際家庭の率が高くなり、中学部では半数に近い割合になる。そういう家庭では中国語で生活をしている場合も多く、この実行委員会はそういう生徒にとっての格好の活躍の場となっている。中国語力に自信はあるが、弁士になるまでではないような生徒たちが活躍する。

中学部では弁論大会のほかに、全学年で行く修学旅行で、現地校との交流を行っている。その際には当然日本語がまったくできない現地中学生との交流になるが、弁論大会では日本語を勉強している月壇中学生が相手である。そのため、交流は比較的容易であるし、会話中心の交流を図ることができる。

(3) 当日の流れ

当日は半日の日程で、以下のプログラムのように流れる。大会は年ごと、日本人学校・月壇中学を交互に運営して行っており、以下は2005年度、日本人学校開催のときのものである。月壇中学開催の場合も多少の順序の逆はあるが、大勢に変わりはない。

<p><開会行事></p> <p>1 開会の言葉</p> <p>2 日本人学校校長挨拶</p> <p>3 日本国大使館挨拶</p> <p>4 生徒会長歓迎の言葉</p> <p>5 審査について</p> <p>6 来賓紹介</p> <p><弁論発表></p> <p>7 弁論発表 (日中8名ずつ, 16名)</p>	<p><交 流></p> <p>8 月壇中学からの出し物 (7人新疆踊り, 手風琴独奏)</p> <p>9 日本人学校からの出し物 (ダンス委員によるダンス, 全体合唱)</p> <p>10 グループ交流</p> <p>11 全体交流</p>	<p><閉会行事></p> <p>12 成績発表</p> <p>13 表彰</p> <p>14 講評</p> <p>15 月壇中学校長挨拶</p> <p>16 閉会の言葉</p>
--	---	---

※ 司会は生徒が担当する。日本語司会1名, 中国語司会1名。

来賓は豪華で、大使館から公使や領事部長が、中国側は西城区の教育工作委員会の重役、また日本人学校理事長、日本人会会長などが臨席し、弁士にとっては大きな励みとなる。年によっては日中双方のマスコミの取材も入り、様々な方面からこの活動が注目されていることがわかる。

中心となる弁論発表の内容だが、基本的には自由とされている。日本人学校では、月壇中学と日本人学校がおこなう「国際交流弁論大会」という場において発表するにふさわしいものを考えるようにという指導だけはしている。参考に2007年度大会の演題を引用しておく。(この年は記念大会ということで、天津日本人学校より特別招待弁士の参加があった。それにあわせて中国側月壇中学の弁士も例年より2名増やしている。)

1 (男・北京日本人学校中学部1年生) 「友達はいいものだ」《有朋友真好》	9 (男・北京日本人学校中学部2年生) 「観光ガイドから学んだ生き方」《我认识的一位中国导游》
2 (女・月壇中学初中3年級) 《我的存在》「私の存在」	10 (女・月壇中学初中3年級) 《手》「手」
3 (女・天津日本人学校中学部1年生) 「本当のリーダーシップとは」《真正的领头人》	11 (女・天津日本人学校中学部2年生) 「フレンドリーってすばらしい」《友善》
4 (男・月壇中学初中3年級) 《不言放弃》「あきらめずに進む」	12 (女・月壇中学初中3年級) 《我的动力》「私の原動力」
5 (女・北京日本人学校中学部1年生) 「北京オリンピックに向けて私にできること」《迎奥运—小事从我做起》	13 (男・北京日本人学校中学部2年生) 「夢に向かって」《向着我的梦想》
6 (女・月壇中学初中3年級) 《离别》「別れ」	14 (女・月壇中学初中3年級) 《向梦想展翅》「夢に向かって羽ばたきたい」
7 (男・北京日本人学校中学部2年生) 「北京の交通状況」《北京的交通状况》	15 (女・北京日本人学校中学部2年生) 「私と中国語」《我和汉语》
8 (女・月壇中学初中3年級) 《日语和我的生活》「日本語と私の生活」	16 (男・月壇中学初中3年級) 《妈妈谢谢你》「お母さん、ありがとう」

上記の通り、日中友好に関わること、自分自身の体験談、友情や家族のすばらしさを述べたものなど、内容は多岐にわたるが、いずれも自分の身近な体験を掘り起こし、それを深めた形をとっている。分量的には5分の弁論である。審査は内容の観点と表現の観点を総合して評価し、日本側・中国側それぞれ1名ずつの「優秀」を選ぶ(上の2007年度大会は参加弁士が多かったので2名ずつ選出した)。

交流会は、両校の発表、グループ交流、全体交流と続く。両校の発表では、例年、月壇中学は踊りや楽器演奏、日本人学校は全体合唱と選抜メンバーによるダンスや応援などである。その後、グループに分かれて交流を行う。交流では改めて名刺をつくり(表は中国語、裏は日本語で作る)、それを交換する。グループによってトランプ等簡

単なゲームを行う場合があるが、中心はあくまで会話である。月壇中学の生徒はみなそれなりに日本語を勉強しているし、日本人学校の生徒も中国で生活している以上ある程度の中国語は話することができる。これは会話中心に交流を行うのには実に好都合である。スポーツ交流のように華やかではないが、それなりに相手と語り合い、落ち着いた、しっとりした感じの交流が図られる。その後も手紙やメールの交換など個人的に交流が続く場合もある。全体交流はジャンケン列車に始まり、最後は全員で一つの大きな円をつくり、そのまま肩を組んで中国の有名なポップス曲「朋友」を歌う。この流れは何度見ても感動的である。

3. 成果および課題

(1) 成果

① 弁士の成長

例年、日本人学校からは6人の弁士が代表となる。3年間で見てきた弁士は全員が「やってよかった」と振り返った。彼らは、語学力や表現力の向上はもとより、半年にわたる弁論の取り組みを通して課題解決能力などが身につく、人格的な成長を実感している。指導する側もそれを意識してあたっている。

② 交流実行委員の成長

交流実行委員に立候補するのは、中国語に少なからず自信を持っている生徒たちが多い。ふだんはあまり前に立つようなことがない生徒でも、この活動では堂々と練習会をしきったり前に立って中国語で会を司ったりする。この活動がそういった生徒たちの活躍の場の確保になっていることは間違いがないだろう。

③ 中学部全体の国際交流に対する意識の向上

はじめにも書いたが、各学校の国際交流の考え方やカリキュラムの違いなどから、国際交流がなかなかままならない現実がある。そのなかでこの活動は非常に意義のある国際交流を展開できる貴重な機会である。「もっと交流をしたかった」と述べる生徒が多く、国際交流の意識が高まったことがうかがえる。また、弁士のがんばりを目の当たりにして、「自分も語学をがんばってみたい」と刺激を受ける生徒も少なくない。

(2) 課題

① 弁士に挑戦する生徒の固定化

弁士に立候補する生徒はやはり中国語が得意な生徒、それも家庭で中国語を用いているなど、ネイティブに近いバックボーンを持っている子がほとんどとなっている。例年、1人くらいはそういう背景がなくて挑戦する生徒がいるが、審査の段階ではどうしても優秀に選ばれるまではいかない。家庭で中国語を用いている生徒とそうでない生徒の中国語スキルの違いは決定的ともいえる。そこで、立候補の段階で挑戦者がかなり限られてしまっている現状になっている。あくまで弁論を通して全人格的な成長を願っており、中国語初心者の方の生徒にももっともっと挑戦してほしいと思っているが、それはなかなか難しい。

② 細かい引き継ぎ資料を残しておくこと

この大会は、日本人学校と月壇中学で交互に開催しているということがあり、2年に1回しか運営を担当しない。多くの生徒が入れ替わり、また教員も異動してしまうという状況で、資料を残しておくことは大事である。

4. おわりに

3年間でたくさんの弁論を見てきたが、月壇中学の生徒たちへの日本や日本語への思いには、一日本人として何よりも心を打たれた。また、ふだんはなかなか感じられない日本人学校生徒の日中友好への思いもこの機会に知ることができた。弁士たち、あるいは大会に参加した生徒が、将来の日中関係を担っていくのだということを思うと明るい気持ちになる。この活動が、今後ますます盛り上がって続いていくことを強く願っている。